

日本の水産を担う



若さで突き抜ける力がある。自社の経営をみるだけでなく、地域の再生も頭から離れない。

は、4年前ぐらいから。漁船漁業構造改革推進会議で新しい漁船像を検討するにあたり、大型巻網漁船のミニ船

され、建造から本格操業が始まった2年目の今年は、サバが豊漁で収益は黒字。好循環が続いている。「でも、漁船がいくらよくなっても、漁業全体がよくなるわけではない。漁場をどう使うか、労働力をどう確保するか、魚価をどう上げるか、全体がどう利益を挙げなのか、問題は山積している」。

そういう問題意識が、地元八戸の漁業復興にも目を向けさせる。「八戸は水産で生きていくしかない。水揚げする市場から加工工場、消費に至るまで、変化し続けている時代に合わせて、官民の力を合わせて、臨機応変な対応をしなければ、地域は埋没していく。だから、八戸市が進めている漁港改革プロジェクトには大いに賛成」。その熱意はじわじわと地元にも広がいつある。「真の国際競争力がある漁業をつくりたい。そのために若造」だけれども、どんな発言していきたい」。

漁業地域の若者から発信する漁業改革

「若造だが発信していく」

青森・八戸の福島漁業専務、福島全良（まさよし）さん（37）は、大学卒業後、大洋漁業に入社した。入社後は冷食、直販などを担当。7年間勤めたあと、10年に父が社長を務める福島漁業に帰ってきた。大洋漁業で加工畑での仕事は居心地もよかったが、「30歳になる前には帰ってこい、脂の乗った時期がいい」と言われ、気持ちがあ動いた。

歴史ある漁業会社の3代目となった。「漁業に従事したわけでもないから、漁業の知識はゼロに等しい」。しかし、それまで別の環境で働いてきた視野の広さと、新しいことを受け止められる柔軟さを武器にしてきた。

漁業界で積極的に発言するようになったの。会議で建造を推進すべき漁船像として指定

青森・八戸 大中型巻網
株福島漁業専務
福島全良さん（37）

世界が水産物に注目し需要も急増する中、日本の水産、漁業はどうか。漁業者は魚価安で苦しみ、資源問題に高齢化と後継者不足。課題のみが浮き上がる。しかし、そんな暗闇の中で小さくとも明るく光り輝いている人たちがいる。これまでの慣習にとらわれないその光は、どんどん明るさを増し、周りを照らし始めてきた。これからの漁業、水産業を担う人たちがここにいる。

